

### 3. 「いわゆる、よい子の顛末」

八幡西保健所所長

中 村 興 睿

『よい子』とは、どんな子どもなのだろうかと考えてみますと、どうも大人の都合が見えてきます。大人にとって、手のかからない、育てやすい、心配や苦勞をかけない子ども、ということになりそうです。逆に、子どもにとっては、大人の手をわずらわせてはいけない、心配や苦勞をかけてはいけない自分（子ども）ということになります。こう考えますと、大人に対して気づかい、気がねし、配慮している子どもが『よい子』ということになります。

また、『母性』という言葉も考えてみましょう。『母性』の発露とは、子どもに対して、時として過敏なくらいの大人の側の反応ということができます。しかも、それは理屈や言葉ではなく、感情や日常の振舞いなどの行動に表われやすいようです。その結果、子どもは安心感や幸せな感じにひたれるのでしょう。勿論、ここでの『母性』は女性のための専売特許ではありません。

『よい子』とは、大人が中心となった世界の中で起きてくる子どもの姿のようであり、『母性』とは、その世界の中心が子どもである場合の大人の気持の中にわいてくる心理的現象のようであります。

今だけでなく、昔も『よい子』を育てる環境は沢山ありました。しかし、この20年来、精神科の窓口には元『よい子』が長蛇の列をなしています。今日ほど、『よい子』にとって生きにくい時代は、かつてなかったのではありますまいか。